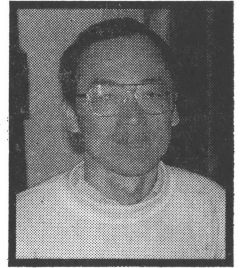


故猪川元興博士著作集



烈日の炎暑が続いた7月末のある日、東京大学地震研究所の加藤照之助教授より、一冊の分厚な装丁本が気象研究所に届けられた。昨年12月23日、突然の病（急性心不全）により42歳の若さで急逝された故猪川元興博士の著作集である。故人の奥様（洋子夫人）の実弟である加藤氏が、私財を投じて故人の論文を主とする著作を再編集・製本し、その内の1冊を気象研究所に寄贈されたのである。

故猪川元興氏は1972年に東京大学理学部物理学科を卒業、1974年大学院理学系研究科物理学専攻修士課程を修了、2年間の博士課程在籍の後1976年に気象庁に入庁された。札幌管区気象台に2年間勤務の後、1978年に気象研究所に移られ、以来予報研究部の中心的研究者として活躍された。この間、1981年から1年間、米国オクラホマ州立大学に留学されている。

氏の業績は最適挿法・変分法を用いた客観解析手法の開発に始まり、さらに非静水圧モデルの開発、モデルを用いた対流や山越え気流の研究へと発展させられた。1991年に「2次元の山を越える多層大気的非線形領域の流れについて」の研究により東京大学から理学博士の学位を授与されている。また最近ではモデルに雪・あられの数濃度まで予報する精密な雲物理過程を組入れ、降雪雲のシミュレーションにも力を注がれていた。

この著作集には氏の最初の著作となった「アメダス・衛星データの客観解析システムの開発」（昭和53年度全国予報技術検討会誌）から、絶筆となった解説文「気象における数値流体力学」（日本造船学会誌、1992年1月）に至る氏の約14年間の研究者生活中に著された、32編872頁の論文・著作が収められている。その大部分を占めるのは非静水圧モデルに関する著作である。氏がライフワークとして開発された気象研究所予報研究部の非静水圧モデルは、モードスイッチの選択により音波を解に含まない非弾性方程式を用いるか、音波を解に含む弾性方程式を用いるかを選択出来るユニークなもので、それらのスキームの定式化と安定性解析、数値計算例を含む

モデルの詳細な解説は気象研究所技術報告（1991年12月）として刊行され、この著作集に収納されている。10年間にわたるモデル開発の集大成ともいえるこの技術報告の完成本を見る事なく、氏が急逝された事はいまだに痛惜の念に耐えない。氏の仕事ぶりは、国内のみならず、国際的にも高く評価されていた所で、訃報を知った米国ユール大学の R.B. Smith 博士、豪州連邦科学産業研究機関大気科学研究所の J. McGregor 博士など世界の一流の学者達から condolences の言葉が寄せられた。

氏は学者・研究者として優れていただけでなく、人間的にも尊敬すべき人物であった。職場では勉強会を主催し若い研究者達を指導され、浅学非才の私に対しても主任研究者の枠を越えてモデルの基礎や数式の導出に至るまで、懇切丁寧な指導をして下さった。また、スポーツを愛され、研究所内で行われるサッカーやソフトボール大会でも予報研究部の中心選手として毎回大活躍された。さらに家庭では良き夫として父として振る舞われたようで、週末は家族とテニスコートで楽そうにボールを追っている姿を時おり目にしたものだ。休日には家族と過ごす、それだけの余力を残す」と口にされていた。モデルの開発と優れた論文の執筆という手間のかかる困難な仕事の両立を遣り遂げながら、どうして他の時間が確保出来るのだろうかと思議に思ったものだが、全速力で人生を駆け抜けた氏にとって、家族と遊ぶ時間さえも自らに課したあるべき生き方の具体化の一つだったのかも知れない。この著作集は私達残された研究者への貴重な参考書となるばかりでなく、氏が愛してやまなかった御家族、特に三人のお子さん達のこれからの長い人生の確かな道標になるに違いない。

著作集として凝縮された氏の業績の重みを手にし、その内容の豊富さと論文の質の高さに氏の偉大さを改めて思い起こす。故人の学問への烈日の想いが伝わって胸を熱くする。

（気象研究所 斉藤和雄）